平成 27 年度

大学生の力を活用した

集落活性化調査委託事業報告書

～実証実験編～

福島県塙町真名畑集落

「里山再生をめざすために」

東北大学地域密着 Lab

平成 28 年 3 月 18 日

目次

Ⅰ.はじめに 3
Ⅱ.地域概要 4
Ⅲ.昨年度事業実施状況 6
①ヒアリング・アンケート調査概要 6
②資源発掘調査 9
③活動の提案 11
Ⅳ.本事業年度活動紹介 12
①活動実施に向けた住民間意見交換会 12
②実証実験概要 14
Ⅴ.実証実験の振り返りと今後の課題 23
Ⅵ. さいごに 25

Ⅰ.はじめに

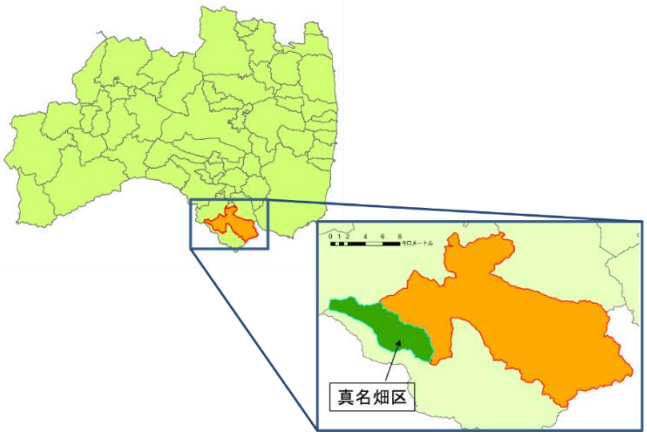
我々「東北大学地域密着 Lab」は、東北大学理学部地理学教室に在籍し、主に人文地理学を専攻している学生が中心となって活動を進めているグループである。昨年度は、「福島県塙町真名畑(まなはた)区」において、今後の活性化に向けての方針を検討していくことを目的として、統計情報集計やアンケート調査、ヒアリング調査を元に実態調査を行い、学生側から経験整備や農地利用策等を提案した。

本事業年度は一年間を通じて、休耕農地を再利用するため、稲作やそば・大豆栽培を行い、それに伴う田植えや収穫等の活動を実施した。本事業年度では、まず休耕地の活用そのものに重点を置き、収穫された農産物の活用・発信については今後の活動で進めていきたいと考えている。

Ⅱ.地域概要

福島県東白川郡塙町は福島県の南東部に位置し、棚倉町、鮫川村、矢祭町(以上福島県)、高萩市、北茨城市、常陸太田市(以上茨城県)と接している。西は八溝山系、東は阿武隈高地に挟まれ、八溝山に源を発する久慈川が町中心部を南北に貫流しており、町域面積は 211.6 ㎢、その林野面積率は約 8 割となっている。2010 年国勢調査によると塙町全体の人口は 9,884 人であり、14 歳未満の年少人口は 1,246 人(全人口の 12.6%)、15 歳以上 64 歳以下の生産年齢人口は 5,551 人(同 56.2%)、65 歳以上の老年人口は 3,087 人(同、すなわち高齢化率は 31.2%)となっており、人口密度は 46.7 人/㎢である。

次に、今年度我々東北大学地域密着 Lab が活動してきた真名畑区について概観する。真名畑区は塙町の西部に位置し、八溝山系の麓に位置する集落である。高品質な奥久慈材の産出地でもあり、豊かな自然に囲まれた地域である。真名畑区は市街地や幹線道路が通り、久慈川の流れる平野部とは山一つ隔てられているものの、県道 196 号線のトンネル貫通以降は塙町中心部へのアクセスが大幅に向上している。また、真名畑区も古くからの歴史を有しており、かつては金の採掘される地として栄えたという。



真名畑区位置図

区の面積は約 26 ㎢、人口は 237 人でそれぞれ町の 12.2%、2.4%を占める。人口密度は、9.1 人/㎢程度となっている。さらに年齢構成についてみると、年少人口が 26 人(真名畑区人口の 11.0%)、生産年齢人口が 125 人(同 52.7%)、老年人口が 86 人(36.3%)であり、2010 年では高齢化率の増加や年少人口・生産年齢人口の減少が顕著となっている。

次に、真名畑区の農業について概観する。真名畑区は農業地域類型でいう山間農業地域、水田集落に分類されている。2010 年現在、真名畑地区における総販売農家数は 27 戸であり、自給的農家も含めると農家数は 52 戸を数える。販売農家のうち専業農家は 4 戸で、ほかの 23 戸は第 2 種兼業農家となっている。

地区全体の耕地面積自体は 39ha であるが、経営耕地面積は 15.3ha、1 販売農家あたり経営耕地面積は 0.57ha となる。経営耕地の用途については田が全体の約 6 割であるほか不作付が 1 割程度を占めている。また、販売農家の耕作放棄地率は 33.5%となっており、全国平均の 10.6%の 3 倍以上にのぼる。

Ⅲ.昨年度事業実施状況

昨年度の活動状況とそれにより得られた地域資源情報や住民の地区や生活に対する考え方と、そこから学生側から提案した活動案について簡潔に提示する。

活動日程	活動内容
9/4(土)	・集落の方との顔合わせ ・集落内散策 ・親睦会(現状に対する考えのヒアリング・意見交換)
11/8(土)～9(日)	・3つのグループに分かれて魅力発見 ①山林散策(自然・歴史) ②集落行事「むじなっぱたき」体験 ③ヒアリング調査 ・集落内の食文化調査 ・アンケート調査

昨年事業年度活動実施状況（オープンカフェ前実施）

①ヒアリング・アンケート調査概要

アンケート調査やヒアリング調査から、50歳代～80歳代の方々が同程度の比率で回答されている。若年齢層については、より良い就業関係を求めて、区・町外地域に出ており、今後集落に戻ってくるかは不明である。しかし、40・50歳代のいる世帯も多いことから、急激な高齢化が進むとは考えにくい。また、退職直後の60～70歳代の方々については、集落活性化に向けての意欲が非常に高く、高年齢層と若年齢層を繋ぐための重要なポジションにあると言える。また、他出者についても、年数回は帰省している方々が多く、また福島県内に住んでいる方々については帰省頻度も高く、今後活動する上で、協力を得られる可能性が高いことが分かった。

		帰省頻度/年					
		0回	1～2回	3～5回	6～9回	10回以上	総計
他出先	青森県			1			1
	岩手県		1				1
	宮城県		2				2
	福島県	1	2	6	3	5	17
	茨城県			1	1		2
	栃木県		2	1	2		5
	埼玉県		1				1
	千葉県		1	2		2	5
	神奈川県	1	1				2
	東京都		3		1	1	5
	新潟県	不明					1
	愛知県		1				1
	福岡県		1				1
	総計	2	15	11	7	9	44

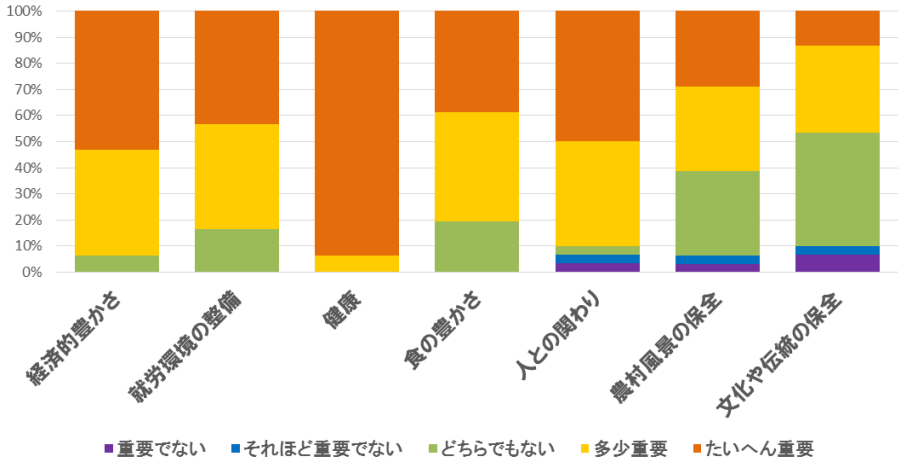
他出先と年間帰省頻度

また、地区の土地利用状況については、販売用よりも自給用作物の栽培のために利用している農家が多い。ただし、休耕水田面積が 44%と、かなり大きな割合を占めている。所有する農地の中で休耕地がおい農家では回答者は会社員が多い。ヒアリングの中でも、このような農家では、両親と同居しているケースも多い。畑地については自家内での農地で自給用として利用されているものの、水田となると管理労力の負担から利用されにくい状況にある。水田を活用している農家では、息子世代が休日に手伝いをしている場合もあるが、今後の利用が持続的かどうかは、若い世代の協力をいかに得られるかが重要である。10 年以上と長期間利用がされていない農家も多く、山間部に位置する里山としての景観が損なわれている状況となっている。こういった土地では、維持管理がされておらず、雑草等の繁茂が進行し、現在手が付けられないような状態になっていることが予想される。また、稲作を行う農家からは、獣害が特にひどいという意見が聞かれた。収穫時期の 11 月上旬に行った調査でも、水田の中で荒らされた跡が観察され、獣害対策のための電線張りも苦労が大きいとのこと。現在集落に猟師は残ってないことや、イノシシを狩っても殺処分

するしか手段がないことが重なり、集落内のイノシシが増頭し、獣害被害が増加している。

獣害被害の様子とその対策

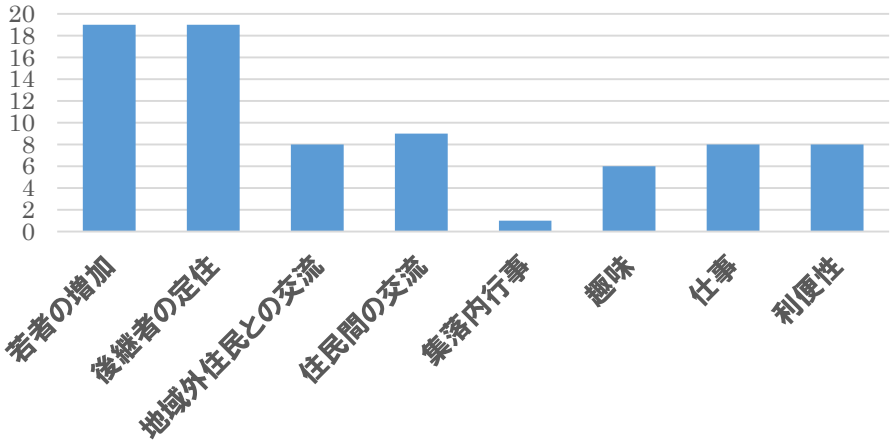
最後に、集落住民の生活や活性化に対する意向を把握する。「健康」が最も重要視されており、「農村風景の保全」や「文化や伝統の保全」の重要性はそれほど高くない。一方で、「就労環境の整備」や「人との関わり」といった項目も重要視されている。つまり、住民同士が協力し合って活動を行い、そこで経済的な効果、利益を得ることで集落住民の生活に対する満足度が向上すると考えられる。



集落(世帯主)が求める豊かさ

次に、集落内で求められている要素としては、最も多いのが「若者の増加」と「後継者の定住」である。次に多くなっているのは、「住民間の交流」や「地域外住民との交流」、「仕事」、「利便性」

といった要素であった。子供がいる家庭については、土日も子供の世話で地域活性化に向けての活動への参加は大変だというような意見を持っている方もおり、アンケート実施の時点では、集落を元気にする活動の方向性が見えず何をしたらいいかもわからないという意見が多く聞かれた。



集落内で必要とされる要素

②資源発掘調査

昨年度の現地調査で、地域資源を【自然】【歴史・文化】【生活】に分けて、まとめたものが 11・12 ページである。集落の方々は、地域の歴史遺産や山林の状況の詳細な情報を持ち合わせていることに加えて、以前活性化に向けて、地区の歴史に関する勉強会も開いており、集落の方々の知識は大きな土台となる。また、林業地域として発展してきた真名畑地区に、八溝山系から注ぎ込む清流で作る自給米のおいしさなども魅力であると考えている。このように、真名畑地区の資源は、農地や山林、河川といった「モノ」としての資源と、集落の方々の技術や知識といった「ヒト」の持つ資源とがある。

地域の魅力【自然・歴史】

今も残る金山跡地や神社，
「自然のトンネル」などの歴史遺産

地域を維持する・伝えていく上で
自分の地域のルーツを知る重要な要素

地域の魅力【生活】

食の多様性

地域の魅力【文化】

【むじなっぱたき】
集落の全世帯を回り，次年の豊作を祈り
歌に合わせて「むじな」でたたく

10月10日のむじなっぱたき
大麦小麦よくあたれ
三角畑にそばあたれ
おまけに

資源	魅力	課題・問題
自然	美しい里地里山景観 立派なスギ林地帯	林道であったり、落石もあったり 気軽に入り込めない
歴史・文化	集落に関する知識が豊富 集落内の重要なアイデンティティ	歴史建造物は山の中にあり、人の目に触れる機会はほとんどない
生活(食)	田舎の味を味わえる 食(レシピ)情報の住民間共有	周知方法の模索

③活動の提案

前述したような資源を基軸として、昨年度学生側からは以下のような活性化案を提示した。主に、活動の実行のしやすさや集落住民への負担の大きさ、既に技術があること等を考慮している。

集落活性化案	アピールポイント	問題
「食」の発信	「食」の多様性を外に発信 (レシピ本など) 集落の女性方の連携 活性化策実施の際の基盤 投資が小さい	発信した後の活動 (集落外の方との交流が埋まるような仕組みづくり(?))
合宿所等の誘致 (外からの受け入れ)	真名畑の豊かな自然・食を感じてもらう 地域の歴史について触れてもらう機会に	活動場所や宿泊場所の確保
景観整備	家屋周辺については、各家庭で花を植えたり、町との事業で「ダリア」の栽培も行っており、継続が重要。女性方の趣味でもある。	「魅せる」方法 耕作放棄地の解消 里山景観を見に来てもらえるようなシステム作り

提案された活動内容

Ⅳ.本事業年度活動紹介

平成 27 年の活動スケジュールは表の通りである。

日時	参加者	活動概要
3/12	学生 3 名	前年度の総括と本年の予定 活動の方向性を考えるワークショップ 水田・畑(そば・大豆)作付け地の見学
5/9・10	学生 6 名 教員 1 名	田植え 民泊(5 件)
9/26・27	学生 7 名 教員 1 名	稲刈り・棚掛け 懇親会 ※大豆・そばの実収穫に関しては、集落住民のみで実施
12/5・6	学生 12 名 教員 1 名	収穫祭：そば打ち体験 交流会：ゲートボール体験・講習

平成 27 年活動スケジュール

①活動実施に向けた住民間意見交換会

前章で示した活動案は、アンケートやヒアリング結果をもとに、地域資源として活かせる資源を踏まえて提案したものであった。しかし、集落の方々の意向はこの時点では、まだ十分に吸収されていない状況であった。そこで、3 月には実際に集落の方々が、真名畑地区の資源を再認識し、活性化のための活動をどのような方向性で進めていくべきかを検討するワークショップを実施した。このワークショップでは、これまで交流の少なかった 30・40 歳代の若い方々にも参加してもらうことで、様々な意見を共有することが可能となった。各グループで挙げられた意見やキーワードを 15 ページに示す。

このように、実際にディスカッションを通して、集落の方々が、農作業では生計を立てられない難しい生活の中で、集落にある自然資源を活用した活動や、趣味や技術を活かした活動を実行して

みたいという意思があり、一つでも多く集落の方の目標や夢を達成することが、集落の活性化につながるのではないかと考えている。また、どのグループにも共通して挙げられていたことが、

①食：特に真名畑の米や水資源の活用がしたい。

②たくさんの人とつながりたい。

③実現したい楽しみはたくさんある。

ということである。

また、このワークショップの中で、一つ目標を掲げるということが重要であること、楽しまなければ活動を積極的に進めることはできないとの声も聞かれた。しかし、活動においては作業のための労働力やコストについては不安が挙げられることも当然ある。しかし、集落住民の活動に対する意欲も大きい。そこで、我々の活動の目標を**「60%の全力　120%の楽しみ」**として掲げ、まずは住民と学生側が強調し、魅力的な活動を行うための基盤づくりを目指すこととした。

グループ 1	グループ 2	グループ 3
人を集める(都会からも) 観光 子供の定住 食べる手段の確保 体験活動 飲める水で作る 直接消費者とつながる 災害はない 今あるものを使う 最終的な移住は大歓迎 米がおいしい・安心 田んぼを貸す 作業体験＋集落での管理 娯楽 キャンプ場 散歩道 川・渓流の利用、自然釣堀 バーベキュー メディアの活用 農業体験動画の発信	民泊してもらう イベント企画 〈魅力あるものに〉 収穫祭 芋煮会 杏の利用 集落での球技大会 「お母さんの味」を提供 一緒に作る 盆踊り復活 交流人口の増加 農地提供も みそ造り 酒米作り 利益追求よりも楽しみを 来てもらった人はリピーターになってもらうような仕組みにする 時間のある 60 代以上が頑張っている姿を見せる	そば作り 一番おいしい秋に収穫 集落外の人に来てもらう 作る＋食べる＋お酒 そばの実を挽く作業も まずは小さい面積で栽培 集落の畑・田んぼの特徴を活かす 多湿な農地 水はけが良い農地 釣堀復活 集落内で様々なものを栽培 食べ歩きマップ 作業的には、今ある農機具で対応できる方がよい イノシシ対策 →薬草(葉わさび、クレソン、どくだみ等) コーヒー豆を作ってるからカフェでマスターがやりたい カフェで音楽演奏も

ワークショップで挙げられた意見・キーワード

②実証実験概要

ここでは次ページより、写真を中心に活動状況を紹介することとする。

a)田植え・民泊

水田については、地域所有者の一部使われていなかった部分を貸して頂いた。また、苗の準備や水の管理については集落住民の方にご協力頂き、学生側は田植えと稲刈りに参加した。

田植えの様子

また、田植え実施後には即席で看板を制作。この際には、これまで建築業を営んでいた方の製材技術を活用し、看板を製材して頂いた。集落内に製材所があることから、木材加工技術は大きな資源であり、今後の更なる活用が期待される。

看板作成の様子

民泊については、5名から協力を頂いた。協力者からは趣味で釣ったヤマメの塩焼きや各家庭の個性あふれる料理を振る舞っていただいた。また、女性の方々の協力も得て、うどん作りも実施した。

民泊の様子

b）稲刈り

稲刈りの様子

棚掛けの様子

蕎麦の実の作付け状況

大豆の作付け状況

c)収穫祭・交流会

収穫祭では、地域の方々の知り合いの方を、そば打ち講師として招き入れ、そば打ち体験を学生に体験してもらった。

高齢の方々との交流会（学生のゲートボール体験）

Ⅴ.実証実験の振り返りと今後の課題

本年度は、今後集落を外部に周知するために有効となる資源、特に食や水を活用した魅力を発信するための基盤として、米やそばの栽培を実施した。今後の方策としては、一年を通じた栽培をより外部の方々に協力してもらうこと、またはオーナー制度等の導入により、地区の土地を有効活用することが可能となると考えられる。別の策としては、今年は実証実験として行うことができなかったものの、昨年度の調査で「ご飯に合う家庭料理」が各家庭にあることも分かった。そのような情報をレシピとして、収穫された米と一緒に販売することも一つであると考えられる。

一年間を通じて得られた意見として、学生側からは普段できない体験をさせてもらうことは非常に有意義である、民泊では集落の方々の豊富な知識や思い出話を聞くことで、昔の生活が想像することができて楽しいといった声が聞かれた。一方で、学生側が地域の活性化のための活動に参加する上で、「客になりすぎない」ということが重要であると思われる。このような活性化を考える上で、参加する側に対しても、集落の方々の活性化に対する意識を認識し、それに対して自らがどのような立場にあるのかを理解しておく必要があるだろう。今後は、活動に参加するためのガイダンス等の作成も必要となる。

集落の方の意見としては、学生が来てくれることに対して楽しみを抱いているようであり、やはり外部との交流を深めることが集落の方にとっての「楽しみ」の一つなのである。しかし、「外部」の範囲がまだまだ狭いことが課題であるため、活動に参加した学生からの積極的な情報発信が今後求められるだろう。前述した通り、集落の方にとって外部の人間は大きな力になる可能性は高い。しかし、外部の人間が、より集落の方々の生活の楽しみの一部となれるように、活動への参加に加えて、積極的にお世話になった集落の方々へのサポートや連絡を取るといったことも求められ

るだろう。例えば、民泊をさせていただいた際には、家の掃除や畑作業の手伝いをすることで、より親睦も深まるだろう。

本事業年度の活動は活性化を進める上での基盤づくりであり、活動の商品化や経済的なメリットを享受できるような仕組み作りを今後進めていくこととなるだろう。

また、これまで 60～70 歳代の、比較的活動する意欲のある方々との交流が中心となった。そこで、ゲートボールを通じた高齢の方々との交流を図った。そこで得られたこととしては、現在行っている活動を知ってもらうことで、新たな情報やアイディアが生まれると考えられる。また、真名畑地区のゲートボールは非常に盛んであり、地区大会での実績も数多くあり、ゲートボールそのものも十分に活性化に活かせるだろう。知性と技術のいるスポーツであり、身近なスポーツとして発信していきたいと考えている。

活性化の基盤づくりとして農地を活用し、米やそば、大豆の栽培を行ったが、グループワークの際には数多くの集落の方々の取り組んでみたい活動がある。そのような活動をより増やし、地域の方々の楽しみを増やすような活動も進めていきたい。

課題を簡潔にまとめてみると、

①受け入れ側と参加側の両者の視点を把握する

②関係者全員で試行錯誤する

③継続的な活動が求められる

ということになるだろう。これらの課題を踏まえて、地域で農地資源を基軸とした活性化策を進めて参りたい。

Ⅵ. さいごに

この二年間、集落代表の石井様ならびに区長様や集落の方々、塙町役場・福島県地域振興課の職員の皆様には、多大なご尽力を受け賜わりました。集落の方々の地区の維持に対する想いを強く感じることができました。我々もこの二年間だけに留まることなく、今後も集落の方々と活性化を進めて参りたいと思います。今後ともよろしくお願い致します。

東北大学地域密着 Lab